

# 近代日本版画家名覧 (1900—1945)

## 〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
  - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
  - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	土井利一（国際浮世絵学会会員）
西山純子（千葉市美術館学芸員）	三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
森 登（学藝書院）	樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

## 戦前に版画を制作した作家たち (14)

【ち】

千葉七郎 (ちば・しちろう) 1919～

1919(大正8)年北海道小樽市に生まれる。1936年中学校〔小樽中学校か〕を卒業し、帝国美術学校西洋画科に入学。在学中の1938年、2月の第25回光風会展に油彩画《ロシヤ人形》が入選。続く5月には角野〔のち金子姓〕誠治・斎藤清・鶴木滋夫と共に「小樽創作版画協会」を設立し、第1回展(8.26～28 小樽・丸井デパート)を開催〔第2回展は計画するも未開催〕。また、12月の第7回日本版画協会展にも木版画《赤い帽子の少女》《ハツ手》が入選した。なお、出品時は府下中野区上高田に住む。翌年北京へ旅行。1941年帝国美術学校を卒業。翌年小樽で初個展「千葉七郎油絵展覧会」を開催。1943年応召され、旭川の北部第四部隊に入隊。応召解除後に戻った東京で空襲を受け、1945年帰郷。戦後は洋画家の国松登らと小樽で「茜絵画研究所」を開設。また、「小樽美術協会」の結成に参画し、事務局を担当。小樽市展の実現に尽力した。1948年からは全道美術協会展に出品するようになり、同年の第3回展で奨励賞を受賞。その後、国画会展にも出品した。1979年に『写真集 千葉七郎 小樽の建物』(噴火湾社)を出版。同書には千葉の写真135点・素描10点の他、版画5点の図版と解説文が収録されているが、その「筆者紹介」に「全道美術協会会員 北海道版画協会会員 一九七六年度個展「小樽の明治洋画建築」開催 北海道小樽商業高等学校勤務」とあり、住所は「小樽市松ヶ枝一丁目五番二十一号」となっている。【文献】『写真集 千葉七郎 小樽の建物』(噴火湾社 1979) / 千葉七郎「交友録・小樽の作家シリーズ④ 画家たちの戦争と平和」「交友録・小樽の作家シリーズ⑤ 市展の誕生」『市立小樽美術館報』12・13(1995.10・1996.3) / 『会員名簿昭和拾七年貳月』(帝国美術学校校友会 1942) / 今田敬一編『北海道美術史 地域文化の積みあげ』(北海道立美術館 1970) / 『金子誠治展』図録(小樽市立小樽美術館 1996) / 『北海道美術の青春期 1925 - 1945』展図録(小樽市立小樽美術館 1999)(三木)

千葉みはる(ちば・みはる)

岩手県に生まれる。本名は躬春。1923(大正12)年北海道函館師範学校を卒業後、東京音楽学校に入学する。学業とは別に独自で律動体操と舞踊の研究をはじめ。1927年同校を卒業し、大分県師範学校に教師として勤務。同僚の図画教師・武藤完一が中心となって、1928年3月に九州で最初となる版画同人誌『木版』を創刊する。同誌には九州・四国・近畿などの中学校や師範学校の教師が版画作品を寄せていて、千葉は編集と発行を担当し、抽象的な図柄の木版画《ダンス》を発表する。しかし、千葉の参加は創刊号のみで、その直後、大分県師範学校を辞し、東京の小学校に奉職。その傍ら、舞踊塾を創設し、発表会を開催。1932年にはパリに渡り、舞踊を学んだ。帰朝後は、異色な創作舞踊を発表しながら、舞踊芸術家としての地位を確立していく。本職の音楽分野では、カスタネットを簡略化したリズム楽器「ミハルス」を考案し、それを使ったミハルス体操・ダンスを創作、それを普及させるために生涯を通じて尽力した。【文献】千葉みはる『ミハルス教本』(共益商社書店 1938) / 『創作

版画誌の系譜』(加治)

茶屋勇次郎(ちや・ゆうじろう)

1930(昭和5)年の第3回プロレタリア美術大展覧会に版画《捕われた》を出品。版種は不明。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

長 さとみ(ちよう・さとみ)

新潟の新発田近郊の画家や詩人らが発行した芸術同人誌『土塊』の第6号(1928.11)に短歌を、第7号(1929.1)に木版画《静物》《年賀状》と詩・短歌を発表する。【文献】新潟県立万代島美術館編『佐藤哲三の時代』展図録(「佐藤哲三の時代」展実行委員会 2008) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

【つ】

塚原蘇水(つかはら・そすい)

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『襟』第2輯(1934)に《賀状》、第4輯(1934.11)に《螳螂》、第6輯(1935.4)に《賀状》を発表する。当時、小県郡滋野村に在住。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「襟」「臥竜山風景版画集』』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

塚原千草(つかはら・ちぐさ)

明治の小説家塚原洪柿園(つかはら・じゅうしえん)の妹で「千久佐」とも称す。『洪柿叢書』全12巻(佐久良書房 1907.7～1910.3)に石版口絵、塚原洪柿園『淀殿』(隆文館 1907・08)などに木版口絵を制作する(未見)。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005)(樋口)

塚本 繁(つかもと・しげる) 1898～1945

1898(明治31)年京都市寺町二条に生まれる。生家は扇子製造を業とする。京都高等工芸学校図案科に学び、1922年同校を卒業。版画は在学中に始め、卒業直前に開かれた神戸弦月画会主催の「創作版画展」(2.23～26 神戸・三宮三〇九番館)に木版画《永遠》《冬》を出品。卒業後も版画制作を続け、翌1923年6月の第5回日本創作版画協会〔京都〕開催を河合卯之助〔結婚の時期は不明であるが、塚本の夫人は卯之助の姉の娘〕らと協力。7月には版画誌『詩と版画』第3輯(7.15)に《永遠》を発表したが、この頃に「詩と版画社」の社友となったものと思われる。続く1924年、神戸・版画の家の『HANGA』第3輯(9.15)に《反逆者》を発表。また、京都で開かれた「詩と版画社第一回展」(10.16～30 京都・円山医院楼上)には《元湯》《向日葵》とエッチング《湯の湖》《題未定》を出品。さらに第6回日本創作版画協会展(11.10～16 日本橋・丸善)にも《向日葵》が入選し、『詩と版画』第8輯(11.25)に《向日葵》を発表した。その後も、1929年の京都創作版画会第1回展に《風景》《雪(浄願寺川)》《雪(赤倉)》《雪(燕温泉)》《雪(妙義山)》、第2回展〔開催年不詳〕に《クルマバックパネソウ》《静物》を出品している。一方、版画以外の活動としては、1924年に河合卯之助・近藤雄三〔悠三〕・伊東新助〔陶山〕らと工芸美術団体「華曼草社」〔華曼艸社〕を結成し、1926年にかけて京都・東京などで展覧会を開催。この頃、ろうけつ染を手がけていたことは、東京朝日新聞の記事(河合卯之助・塚本談「涼しい装飾に ろう染の新味 たれにも容易な廃物利用」

(1926.7.9 朝刊)などで確認できる。なお、同社での活動は、1927年頃に河合が抜けた後も、近藤・伊東と共に1930年頃まで続け、1931年には洋画家赤沢鍼太郎らと「草芽会」を結成。また、1940年の第5回京都市展に工芸作品《葡萄彫文金庫》を出品している。塚本を知る漆芸家水内杏平は、「塚本繁っている人は高等工芸学校の図案科の出て、図案家として、山科におられましたか、これはもう漆も陶器も染めも版画もなんでもやっておりました。ま、元々図案家として、この人はそんなんで、あまり何でも幅が広すぎたもんですから、あまり凝ったものは出来ておりません。実はこの人は、古い方はご存じになっている方があるかもしれませんが、新京極の四条の入り口の所に、ちょうど新京極の大きな鉄のアーチが立っておりました。もう今は無くなりましたが、そのデザインをこの塚本さんがやったんです。そういったデザイナーなんですね」と語っている。この他、舞台装置・ウィンドー装飾・『京都園芸』（京都園芸倶楽部発行）の表紙絵なども手掛けたようである。1945（昭和20）年1月13日京都市山科で逝去。【文献】『神戸弦月画会主催創作版画展目録』（1922）／『詩と版画社第一回展覧会目録』（1924）／岡田毅『京都における創作版画運動の展開』『京都府総合資料館紀要』12（1984）／『京都の近代版画－円山応挙から現代まで－』展図録（京都市美術館 1996）／水内杏平『講演 近代京都の漆芸（四）』『視る』380（京都国立近代美術館 1999.3）／『大正期美術展覧会出品目録（東京文化財研究所 2002）』／『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『画家の絵手紙国画創作協会の画家たちを中心として』展図録（笠岡市立竹喬美術館 2008）／『創作版画誌の系譜』（三木）

#### 塚本 哲（つかもと・てつ）1901～1980

1901（明治34）年1月8日島根県飯石郡来島町野萱に生まれる。幼名は「僧哲」。生家は「西光坊」という寺であったという。地元の小学校卒業後、16歳の時に大阪に出て、寺の小僧をしながら勉強を続ける。1923年東洋大学社会事業科に入学。1926年同校を卒業し、伊豆大島の知的障害者施設「藤倉学園」の研究生となるも、半年ほどで東京に戻り、1930年暮まで本所の愛国婦人会の隣保館（セツメント・ハウス）などに勤務。その後、およそ2年間の浪人生活を送ったが、1932年東京市社会局に採用され、社会事業を担当する公務員として歩んだ。戦後も東京都民生局に勤め、新生活運動の一つとして1951年に設立された「東京都立新宿生活館」の初代館長に就任。1958年に定年退職したが、同年東洋大学非常勤講師、翌1959年同大学教授、1970年佛教大学教授、1975年東北福祉大学教授などを歴任。高齢者の福祉事業などにも取り組み、社会福祉家として知られた。1980（昭和55）年8月1日東京都板橋区の病院で逝去。

版画は、1931年から1932年にかけての浪人時代に諏訪兼紀（1897～1932）の手ほどきで始めたという。その後も独習し、1936年4月の第11回国画会展に木版画《葛飾風景》が初入選。以後、第15・16回展を除き、1944年の第19回展まで毎回出品。また、日本版画協会展も1937年11月の第6回展に《朝明け》《三つ峠》が入選し、1944年の第13回展まで連続して出品。その間、1940年の第4回海洋美術展に《〔題不明〕》、1941年の第4回新文展に《早春》が入選。1943年の第12回日本版画協会展では褒状を受賞し、会員に推挙された。また、1941年に平塚運一の呼びかけで結成された「きつつき会」にも参加。

第1回きつつき会版画展（1942.7.21～25 銀座・青樹社）に《沼》、第2回展（1943.7.20～24 銀座・青樹社）に《港》《夾竹桃》《伊豆風景》を出品。同人による版画集である『きつつき版画集』の昭和17年版（1942.8.25）に《木蓮》、昭和18年版（1943）に《牡丹》を發表した。戦後は、再開された1946年の第20回国画会展に《寒明》を出品。翌年の第21回展で版画部会友に推挙され、1979年退会。また、日本版画協会展にも1946年の第14回展に《出雲牛供養》など4点を出品。以後、第25・26・32・35回展をのぞき、1978年の第46回展まで毎回出品。1981年の第49回展には遺作2点が陳列された。また1946年か、恩地孝四郎の主宰する「一木会」にも参加し、5月の「一木集Ⅱ」に《牛久沼》を發表。以後、1950年12月の第Ⅵ輯（最終輯）まで作品を發表した。なお、1952年頃からは、恩地らが講師を務めた日本版画協会による「現代版画研究会」（1949～）の会場に、自身が館長を務める「東京都立新宿生活館」を提供。また、塚本が保管していた諏訪兼紀の旧蔵資料は、1979年に東京都美術館に寄贈され、現在は「諏訪文庫」として東京都現代美術館美術図書室で公開されている。【文献】天野マキ『シリーズ福祉に生きる 12 塚本哲』（大空社 1998）／『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『〔第14～49回〕日本版画協会展目録』（1946～1981）／『国画会版画部史』『2011第85回国画会版画部画集 第29巻』（国画会版画部 2011）／『諏訪文庫目録 前田文庫目録-付・東京都美術館蔵版画誌目録-』（東京都美術館 1988）／『創作版画の系譜』（三木）

#### 塚本孫衛（つかもと・まごえ）1917～没年不詳

1917（大正6）年に生まれる。静岡中学時代から版画を作り、1932年、静岡で浦田儀一・真澄忠夫らが中心となって発行した版画同人誌『版画座』の第2号（1932.12）から同人となり作品を發表。第2号に《日本平風景》（版画欠落のため未見）、第3号（1933.1）に《画状〔賀状〕》、〔通巻4〕号（1933.2）に《裁縫》《風景》、第7号（1933.5）に《日本平風景》、第8号（1933.6）に《祭》と表紙絵、〔通巻9〕号（1933.7）静岡郷土玩具画集に《テッコロボー人形》《獅子頭人形》、〔通巻10〕号（1933.8）に《日傘》、〔通巻11〕号（1933.9）に《風景A》《風景B》、〔通巻12〕号（1933.10）に《お琴》《風景》、第13号（1933.11）に《無題》《顔》と表紙絵、第14号（1933.12）に《人形》、第15号（1934.3）に《子供A》《子供B》を發表した。なお、第12号の《お琴》については「洋服で弾いてゐるのが面白かったので。〔中略〕僕としては苦しかったです。」とコメントしている。戦前は静岡市呉町4丁目に在住。1967年当時は静岡市古庄で特種紙工場を営み、静岡市馬淵1丁目10-16に住む。なお、『版画座』第5・6号は未見。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房 1967）／『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 月岡玉静（つきおか・ぎょくせい）1908～1994

能画家月岡耕漁（1869～1927）の長女として1908（明治41）年東京に生まれる。本名は文子（ふみ子）。月岡芳年の孫にあたる。1929年女子美術学校を卒業。松岡映丘に師事。1925年頃より版元大黒屋から刊行の木版画集『狂言五十番』では16図制作後に逝去した耕漁のあとを継いで「江文」名で残り34図を制作し完成させる（昭和初頃）。その後「玉静」と号し、木版画集『能寿加多』（第2輯7図のみ確認、《草紙洗》《松風》《富士太鼓》《竹雪》《〔翁〕》《〔落武者〕》の6図は1931年、《〔女〕》は1937年）の制

作や1938年以降は渡辺版画店より能画を題材にした木版画〔凡そ30点〕を刊行。第110回美術展覧会（日本美術協会主催 1940.4.14～4.29）に木版画《花月》《薔〔しとみ〕》（いずれも渡辺版）を出品する。1945年新潟県高田市（現・上越市）の真宗浄興寺派本山浄興寺に嫁ぎ、「稲田」姓となる。同地で晩年まで絵画の制作は続けるものの、版画の制作は途絶えたようだ。1994（平成6）年上越市で逝去。【文献】『日本美術展覧会第110回目録』（1940.4）／「月岡耕漁」（University of Pittsburgh The Art of Noh.1869-1927 2016.10.9）／『東京国立近代美術館所蔵目録 版画 1993』（1993.3）／『近代の能画家 月岡耕漁展』図録（城西国際大学水田美術館 2005）／「『狂言五十番』月岡耕漁・江文」（能楽資料・文化デジタルライブラリー 2016.10.19）（樋口）

#### 月岡耕漁（つきおか・こうぎょ）1869～1927

1869（明治2）年3月7日（または2月10日）日本橋区馬喰町3丁目に生まれる。通称「辨之助」。父は旅館近江屋・羽生善兵衛（久亮）の次男。母は本石町4丁目の坂巻又兵衛次女の泰（たい）。1881年に母の泰が月岡芳年の再婚者となる。その関係もあったものか同年に、横浜の伯父宮内林谷のもとで陶器絵付図案を約3年学ぶことになる。1883年からは東京府画学伝習所で結城正明に指導を受ける。翌年から福島県窯業徒弟学校・会津本郷実業学校の図画教師を3年間勤める。1887年には月岡芳年の指導に就いて「年久」の号を受ける。1889年頃には日本画（肉筆）の師として尾形月耕のもとに入門し、「耕漁」の雅号を授かる。1890年から日本美術協会展・日本青年絵画協会絵画共進会などに出品し入選、専ら日本画家の道を歩む。また、正確な入門時は不明だが、松本楓湖の門にも学び「湖畔」の号を受けている。1908年文展2回に《黒川能》が入選。1910年の日英博覧会には《謡曲石橋》が入賞し、宮内省御用品となる。この年に母の遺言で坂巻姓から月岡姓となり月岡家を継ぐ。版下絵では1893年以来『風俗画報』挿絵の筆を執り、1898年頃から1913年には能楽に関する挿入画を専らとし「能画の耕漁」として広く知られた。版画は、『能楽図絵』前編・後編・続編を1897～1902年に刊行、全260図、目録5図（大黒屋松木平吉版）。『能楽百番』前編後編を1922年～25年に刊行、合計122枚102図（二枚続き、三枚続きを一図に換算）目録付き（大黒屋松木平吉版）。そのほかに小品版画や絵葉書もある。坂巻耕漁の名でも知られ、娘文子も月岡玉瀟の名で能画を描き、版画出版もある。門下に松野奏風がいる。1927（昭和2）年2月25日敗血症のため逝去。【文献】『近代の能楽家 月岡耕漁展』図録（城西国際大学水田美術館 2005.9）（岩切）

#### 月岡忍光（つきおか・にんこう）1897～1976

1897（明治30）年月岡藤太郎の三男として長野市篠ノ井に生まれる。本名は久義。15歳の時に松代の円福寺に弟子入りをし、「忍光」の僧名を授かる。長野県立中学校（現・県立長野高校）を経て、東洋大学を卒業する。卒業後は釧路中学を始め各地の中学校等に赴任し、教員として活動した後、愛知県豊橋中学校（現・時習館高等学校）の教師となる。1933年頃に版画に興味を示し独習、『豊橋の薬屋』などの作品を制作する。1934年には料治熊太が主宰する版画同人誌『白と黒』『郷土玩具集』（白と黒社）の他、静岡の『かけた壺』（龍南芸術研究会）『ゆうかり』（童土社）などの同人誌に作品を発表する。なかでも料治

熊太との関係は強く、『版芸術』47号を「月岡忍光版画集」とした他、『土俗玩具集』『おもち絵集』『版画蔵票』などに積極的に作品を発表する。その他、『陸奥駒』16集（夢人社 1934）、『朱美之集』第1～4冊（朱美之会 1940～41）、『九州版画』第12・13号（九州版画協会 1941）に作品を発表している。また、豊橋に在任時には、松代に帰郷するたびに、『櫟』の主宰者小林朝治（須坂）の所に通い、交流を深めると共に同人となる。1936年に武井武雄の「櫟の会」の会員になると共に、同年の第5回日本版画協会展に《蟹》《木蓮》を初出品し、第6・7・9回展と出品した後、一時中断する。

1938年に豊橋中学校を退職し、松代に戻り浄福寺の住職となる。日本版画協会は第18回（1950）に会員に推挙され、以後出品を続ける。作品は静物や四季折々の田園風景等の風景を多く描く。1976（昭和51）年浄福寺において78歳で逝去する。2007年に須坂版に画美術館に於いて「月岡忍光と交友の版画家たち」展が開催された。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前期』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』／『日本版画協会史 1931-2012』（日本版画協会 2012）（河野）

#### 佃 政道（つくだ・まさみち）1901～1992

1901（明治34）年3月26日岡山県岡山市に生まれる。1919年私立関西中学校を卒業し、東京美術学校予備科図案科に入学。中学時代、1914年から卒業まで「岡山洋画研究会」に参加し、児島虎次郎・吉田苞の指導を受けたが、油彩画より水彩画が得意だったという。また、中学校で料治熊太と出会い、その交友は生涯続いた。1924年東京美術学校を卒業。東京・神田の今川小学校の教員となるも、翌年千葉県館山での写生旅行中に病を得て退職。1930年頃まで同地で長期の療養生活を送った。その間、1929年の第16回日本水彩画会展に《公園の木々》《廃船》、翌年の第17回展にも《丘の木々》《石切場風景》が入選。会員に推挙され、1950年まで所属した。版画は、1930年に料治熊太の勧めで始め、料治の主宰する版画誌『白と黒』（1930.2創刊）の第3号（5.1）に木版画《廃船》を発表。以後、同誌の常連として第4～6号（6.1～9.1）、第8～13号（11.1～1931.4.1）、第15～17号（6.1～9.1）、第19～25号（11.1～1932.7.1）、第29号（11.1）、『版芸術』の第1～4号（1932.4.1～7.1）、第6号（9.1）、第9号（12.1）、第21号（1933.12.1）に作品を発表した。また、料治とともに、1930年静岡で開かれた第2回童土社展（10.11～13 田中屋襦衣店）にも《樹》《芝浦風景》《廃船》を出品している。1932年からは愛知県立瀬戸窯業学校（戦後、愛知県立瀬戸窯業高等学校と改称）の美術教員となり、図案・図画・陶画を教え、1960年退職。その後は、名城大学建築科の講師（1960～1978）となり、建築意匠学などを教えた。また、1961年からは岩田覚太郎・木下富雄・佐藤宏・鈴木幹二と共に「版画五人展」（愛知県美術館）を開催するようになり、1992年まで毎年出品。1971年に『版画大和路』（徳間書店）を出版。自序・自作版画図版100点・参考写真・解説文などを掲載したが、料治熊太も「『大和路』へ寄せる心」と題する文を寄せた。また、翌1972年には同書の出版を記念した「大和路版画百景展」（新宿・伊勢丹）を開催している。晩年は、版画制作の傍ら瀬戸市文化財保護専門委員会委員（1973～1977）、瀬戸市文化財保護審議会委員（1977～1989）なども歴任した。1992（平成4）年9月28日愛知県瀬戸市で逝去。【文献】佃政道『版画大和路』（徳間書店 1971）／『生誕百周年回顧展 佃

政道』図録（瀬戸文化センター 2001）／『日本水彩画会第十六回展覧会目録』『第十七回日本水彩画会展覧会目録』（1929・1930）／『第二回童土社絵画展覧会』目録（1930）／『創作版画誌の系譜』（三木）

## 辻 愛造（つじ・あいぞう）1895～1964

1895（明治28）年12月21日大阪の南船場に表具師辻庄次郎の次男として生まれる。1910年湯川松堂塾で日本画を学ぶが、1912年赤松麟作に師事して洋画に転じる。1915年上京して太平洋画会研究所に入所するも半年で帰阪、再び赤松塾に学ぶ。以降は大阪を拠点に活動する。1917年第4回展覧洋画部に《日盛り》が入選、1919年まで同展に出品。1924年第1回大阪市美術協会展に出品し、同会会員となる。1926年国画創作協会洋画部新設以降は同会さらには国画会（国展）に出品する。この間、岸田劉生らの「草土社」の活動に影響を受け、1926年に大石輝一・伊藤慶之輔らと「艸園会」を結成し「艸園会第一回洋画展覧会」（11.4～6 神戸・中央メソジスト教会）に出品するが、翌1927年5月第2回艸園会展開催中に大阪洋画協会が結成されると、艸園会を脱退して同会会員となる。1928年寺澤ヨイと結婚し寺澤姓となり、西宮市に転居。「香榎園洋画研究所」を開設し、後進の指導にあたる。1934年国画会会員に推挙され、晩年まで国展に出品の傍ら、関西総合美術展（大阪市展改称）にも第1回展（1950）から晩年まで出品を続けた。1957年兵庫県文化賞を受賞。1962年頃よりガラス絵の制作に取り組み、「大阪懐古風景」の連作など多数のガラス絵を描いた。1964（昭和39）年6月3日西宮市で逝去。没後に『辻愛造ガラス絵画集』（辻愛造ガラス絵刊行会 1965）が刊行される。

版画の制作は、幼少期に親しんだ明治・大正・昭和初期の大阪を再現したいとの思いで、1930年頃より自画自刻による木版画《千日前樂天地》《偕行社》《道頓堀夜景》《東横堀川》《梅田駅》《年の市》など一連の『大坂風景版画集』（2枚組 各5円10銭で頒布）を第3輯まで刊行する。松枝重子編「辻愛造年譜」（『西宮市大谷記念美術館 NEWS』2 1992.4）によると、その後に制作した版本（年譜によれば「二集八景」）は摺師の家にあつたため1944年の震災で消失したという。その他の作品としては、『あしべ踊』（1930頃 木版・水彩）や『大阪歌舞伎座手摺木版絵葉書』第壹・第貳（何れも各3葉 耕雲堂版 1932）、『芝居版画集 第参集』（絵葉書判3葉 刊年不明）など芝居に関わる木版画の制作がある。なお同年譜によると、1930年12月の第4回大阪薬学専門学校絵画部展に版画1点を出品している。【文献】『柳屋』47（柳屋画廊 1932.10）／「辻愛造年譜」『西宮市大谷記念美術館 NEWS』2（1992.4）／『西宮市大谷記念美術館 開館30周年記念所蔵目録』（2003）／『洋画家 辻愛造とその周辺展』図録（西宮市大谷記念美術館 2007）（樋口）

## 辻 永（つじ・ひさし）1884～1974

1884（明治17）年2月20日広島市に生まれる。同年茨城県水戸市に移住。県立水戸中学校時代に画家を志し、図画教師の白馬会会員・丹羽林平に油絵を学ぶ。1902年東京美術学校西洋画科本科へ進み、岡田三郎助に師事。同年第7回白馬会展に《風景》で初入選、1908年には第2回文展で《秋》が初入選。同年渋谷村に移住、弟が山羊園を開いたことから山羊をよく描き、1910年の第4回文展で《飼はれたる山羊》が三等賞受賞。その後も同じ題材で受賞を続け、「山羊の画家」と呼ばれた。1920年渡欧、

イタリアやフランスを中心に広くヨーロッパを巡って翌年帰国、風景画家としての方向性を定めた。以後、官展審査員を歴任し、戦後も日展第2回展より審査員。洋画界の重鎮として日展および光風会で活動を続け、1958（昭和33）年に社団法人日展の初代理事長、翌年には文化功労者となった。少年時代より好んだ草花の写生を戦前から戦後にかけてまとめた『萬花図鑑』『續萬花図鑑』『萬花譜』でも知られる。1974（昭和49）年7月23日東京都渋谷区にて逝去。

版画は最初期にわずかにあり、白馬会の若手からなる「L.S.会」が創刊した雑誌『L.S.』第1号（1905.7）に石版画《眠》、第2号（1905.8）に《スケッチ（下駄屋）》、1913年2月の雑誌『ル・イブウ』創刊号に木版画《牧童》を発表している。ほかに年代不詳の多色摺木版《港》があるが、滞欧期の油彩画に関連するとすれば、大正後期のものであろう。【文献】『辻永展：「山羊の画家」の軌跡：特別展』図録（水戸市立博物館 1986）／『辻永画集』（六藝書房 1991）／寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現－『月映』誕生の背景を巡って－』『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）（西山）

## 辻川新十郎（つじかわ・しんじゅうろう）

京都在住の独立美術協会系の画家だったと思われる。京都市美術展覧会第1回展（1935.5）に《静物》、第2回展（1937.5）に《新緑の植木畑》、第3回展（1938.5）に《花》、第4回展（1939.5）に《相撲風景》《衣笠早春》、第5回展（1940.5）に《見物人》、第6回展（1941.5）に《樂シキ日》、第7回展（1942.5）に《山櫻の頃》《耐久競争》、第8回展（1943.5）に《樹々新》、さらに翌年の奉祝京都市美術展覧会（1944.7）に《初夏》を出品。京都市展には洋画家の須田国太郎や北脇昇、銅版画家の中井平三郎らも第1回展から出品しており、辻川は須田や北脇らとともに1936年8月8・9日に西田武雄を講師に招いて開催された京都エッチング講習会（幹事：中井平三郎、会場：関西小国民社）にも参加。同講習会参加記念として交換したと思われる裸婦のエッチング作品が須田の遺品中に残されており、辻川がエッチング作品を制作していたことがわかる。なお、経歴については不明な点が多く、1900年京都の「丸越」呉服店の生まれで、戦前は京都第一商業学校配属将校、戦後は1956年宇野又二が中心となって発足した居合同好会で居合の指導などを行ない（本業は税理士）、1972（昭和47）年2月8日に逝去した「辻川新十郎」という人物がいるが、同一人かは確認できていない。【文献】『エッチング』47／『第7回 須田国太郎展』図録（白銅鞮画廊 1997）／『昭和期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2006）／「剣術家・山城正樹の回想」（二十代山城正樹－@nifty ホームページサービス 2016.10.16）（樋口）

## 辻堂善次郎（つじどう・ぜんじろう）生年不詳～1962

富山県に生まれる。1926（大正15）年東京美術学校彫刻科木彫部本科に入学。彫刻を学ぶ傍ら、彫刻科木彫部の先輩である森大造・村井辰夫らが校友会活動として始めた版画部にも参加。目録が判明しているものだけではあるが、1928年2月の「椎ノ樹第1回創作版画展」に《雪景》《風景》《一と枝の実》、6月の第3回展に《池の金魚》《静物》《風景》を出品した。1931年東京美術学校を卒業。その後の活動は不明である。1962（昭和37）年5月27日逝去。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第

三巻』（ぎょうせい 1997）／『〔東京美術学校〕校友会月報』26・8・27-3（東京美術学校校友会 1928.3・7）／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010）（三木）

### 津田健次（つだ・けんじ）

1929（昭和4）年の第9回日本創作版画協会展に木版画《河岸》が初入選。続けて日本版画協会展に出品し、第1回展（1931）に《線路》《港》、第2回展（1932）に《夜》、第4回展（1935）に《EX・LIBRIS》、第5回展（1936）に《風景》《赤い煙突のある風景》、第7回展（1938）に《秋》《木曾谷》、第9回展（1940）に《飛騨白川郷》《戦場ヶ原》、第12回展（1943）に《冬の山 御坂・道志の山を望む》《春の山麓》が入選。また、1931年から1933年にかけては白日会展にも出品し、第8回展（1931）に《階橋と家》《習作（アサヒ新聞）》〔目録には「健治」とあるも誤記か〕、第9回展（1932）に《蔵書票》、第10回展（1933）に《横浜》が入選した。1935年頃は東京に住む。その他の消息は不明である。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『白日会展総出品目録〈第1回～第59回〉』（白日会 1984）（三木）

### 津田青楓（つだ・せいふう）1880～1978

1880（明治13）年9月13日京都市上京区（現・中京区）押小路麩屋町に生まれる。もと西川姓、本名は亀治郎。西川家は江戸中期から続く生花「去風流」の家元で、西川一草亭は兄。小学校を終える頃、母の生家に養子に入り、津田姓となった。兄とともに四条派の画家竹川（升川）友広から絵の初歩を習い、1896年（または97年）京都市立染織学校に入学、同じ頃谷口香嶠に入門。1900～03年兵役に就き、除隊後は京都高島屋図案部に勤務。日露戦争により1904年再び応召して、1906年大連から帰国、この頃関西美術院にも学んでいる。翌年4月、農商務省海外実業練習生として安井曾太郎とともにパリへ渡り、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。帰国した1910年の末に田中喜作らと「黒猫会」を結成するもすぐに解散となり、東京へ移り住んだ。1911年第5回文展で《五月のインクライン》が初入選。同年茅野蕭々との親交から小宮豊隆を知り、その紹介で夏目漱石と親しみ、「木曜会」の一員となった。漱石には油絵も教えている。1914年二科会創立に参加、同じ頃良寛の書にふれ感銘を受け、以後研究を続けた。1918年石井柏亭と新日本画展覧会を開催して初めて日本画を発表。1926年頃京都東山靈山に「津田洋画塾」を開き、多くの門下を集めるが、河上肇に心酔してプロレタリア運動に接近、制作に政治色が強まる。1931年の第18回二科展に出品した《ブルジョア議会と民衆の生活》などで官憲に監視されるようになり、小林多喜二の虐殺に取材した《犠牲者（拷問）》を制作中の1933年検挙。釈放後は二科会を退き、画塾も解散し、日本画に転向した。以後、南画や書・詩歌・随筆などを広く手がけて独自の自由な境地に達している。1974年10月山梨県一宮町に青楓美術館が開館（現在の笛吹市青楓美術館）。1978（昭和53）年8月31日東京都杉並区にて逝去。

大正期までに木版の仕事が多く、それらは①明治後期の図案、②1912年前後に集中する雑誌の表紙や挿画、③1912年の森田草平『十字街』に始まり漱石やその一門らの著書に及んだ装幀、④1913年に立ち上げた「青楓図案社」

で制作した書簡箋や封筒・葉書などに大別される。まず図案では、本田雲錦堂および山田芸艸堂から刊行した一連の図案集—1896年の『宮古錦』（共著）に始まり『華橋』『華紋譜』（花之巻・楓之巻）『青もみぢ』『図案集』『紋様小品』『うづら衣』『精英』（共著）『染織図案』『競華』（共著）『ナツ艸』を経て1906年の『（第二期）青もみぢ』に至る—がある。はじめ神坂雪佳の影響下にあり、また既成図案の再構成をよしとしていたが、兵役中の『うづら衣』以降写生から図案を展開するようになり、斯界に新風を送った。図案の仕事としてはこのほかに京都高島屋図案部における『衣装』表紙、1904年より西川一草亭・杉林古香とともに刊行した図案雑誌『小美術』全6冊と関連する『小美術圖譜』、古香と組んだ1906年の図案集『落柿』上下などがある。図案の仕事の多くが美しい木版によるが、版の絵としての意識は留学から戻った1910年以後芽生えたといえる。帰国してまもなくの雑誌の仕事には『ホトトギス』『文章世界』『劇と詩』『早稲田文学』『ル・イブウ』などがあるが、たとえば『ル・イブウ』創刊号（1913.2）の目次には「表紙と裏絵（自刀）」と明記され、創作版画の流れを汲むとわかる。背景にはこの時期の富本憲吉との交友や琅玕堂などにおける小美術の活動であろう。1913年11月16日発行の『大阪朝日新聞』日曜付録「版畫展覧会」に発表した「木版画に就ての経験」では、1・2年前に京都で富本に会い、木版の話聞いて制作を始めたと言っている。1912年に始まる装幀の仕事はその流れにあり、自刻木版を多く用いて版構成の面白さを感じさせるものが多い。代表作に夏目漱石の『色鳥』『道草』『金剛草』『明暗』『草合』縮刷本、与謝野晶子『明るみへ』、鈴木三重吉『桑の實』などがある。百数十に及ぶという装幀の一部は後年改めて木版に起こされて『装幀図案集 第一輯』（芸艸堂 1929）に収録されたが、同書の跋に本人が語るように、装幀の造形にはやはり富本の影響が大きい。また「図案に就ての感想」（『美術之日本』6巻8号 1914.8）で述べられたとおり、そもそも図案に創造性を求めるについては浅井忠に多くを学んでいる。【文献】津田青楓「木版画に就ての経験」（初出は1913年11月16日発行の大阪朝日新聞日曜付録「版畫展覧会」、『現代の洋画』23号に再録）／津田青楓『装幀図案集 第一輯』（芸艸堂 1929）／津田青楓『自撰年譜』（津田青楓 1940）／津田青楓「装釘回顧談」『春秋九十五年』（求龍堂 1973）／寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を巡って—」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）／『津田青楓の図案 芸術とデザイン』（芸艸堂 2008）／大平奈緒子「津田青楓の図案の変遷—京都時代のデザインについて—」『大正イマジユリィ』10（大正イマジユリィ学会 2015.3）（西山）

### 津田節子（つだ・せつこ）

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及の目的で、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のために版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森、北陸などを回ったが、8月9日は富山市富山中学校（主任教諭飯田文一）でエッチング・木版画・素描の講習会（講師：西田武雄、武藤完一、小野忠重など）を開催（小野忠重「北方記行」『エッチング』70）。当時、富山県女子師範学校に在学中の津田も参加し、その時の作品とみられる樹木を描いたエッチングが西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第70号（1938.8）に掲載されている。【文献】『エッチング』69・70（加治）

### 蔦谷龍岬(つたや・りゅうこう) 1886～1933

1886(明治19)年7月28日青森県弘前市鍛冶町に生まれる。本名は幸作。1902年に上京、寺崎広業に入門。1906年東京美術学校日本画科に入学、1910年卒業した。まもなく広業のもとを離れて独自の大和絵を展開、1915年の第9回文展で《静日》が初入選。第12回文展では《御堂の朝》が特選を得る。平家物語によく取材し、官展を舞台に成功を収め、1919年第1回帝展より無鑑査、1924年の第5回展より展覧会委員となっている。1926年に画塾「鐸鈴社」を開き、また東奥美術社展に協力するなど後進の育成にも尽くしたが、若くして1933(昭和8)年10月7日東京市下谷区上野桜木町にて逝去。版への関わりとしては、『日蓮聖人御伝木版画』(日蓮聖人御伝版画刊行 1928頃)に収められた「星下奇瑞」が知られる(1937に再版されたと推定)。【文献】『郷土の先人を語る(8)平沢三右衛門(三上善三郎) 蔦谷龍岬(中畑長四郎) 鳴海要吉(船水清)』(弘前市立弘前図書館 1971)(西山)

### 土田麦僊(つちだ・ばくせん) 1887～1936

1887(明治20)年2月9日新潟県佐渡郡新穂村に生まれる。本名は金二。1903年金沢村正覚坊の志和舜雅に連れられて京都知恩院に入るものの画家を志して出奔、鈴木松年入門して息子の松僊に日本画を学ぶ。1904年竹内栖鳳に師事し、麦僊と号す。1908年第2回文展に初入選し、三等賞を受賞した。1909年京都市立絵画専門学校の別科に入学し、1911年に卒業。その間、1910年に田中喜作らと「黒猫会」(ル・シャ・ノワール)、1911年にはその発展である「仮面会」(ル・マスク)を結成し、ゴーギャンら後期印象派の作風に共鳴しつつ色面の対比を基調とした画面に個性の表出を目指して創作した。この年(1911)第5回文展に入選し褒状を受け、以後1912年の第6回文展から1917年第11回文展まで毎回入選した。しかし、1914年の第8回展で古画に学んだ《散華》が褒状を受けたり、1915年の第9回展で桃山の障壁画に学んだ《大原女》が3等賞を受けたりしたが、さして高く評価されることはなかった。1918年文展審査に不満を抱いていた村上華岳・榊原紫峰らと新しい日本画の創成を目指して「国画創作協会」を結成、協会展の活動を先導しつつ、《湯女》(第1回展)《三人の舞子》(第2回展)《春》(第3回展)を発表して内面描写を深化させていった。1921年黒田重太郎を先導役として小野竹喬・野長瀬晩花らと渡欧し、フランス・イタリア・イギリス・スペインなどを旅行しつつ西洋絵画を研究する(翌年帰国)。1924年国画創作協会第4回展にイタリア・ルネッサンス絵画に学びつつ日本美術の平面性、装飾性、線描を強く意識した《舞妓林泉図》を発表し大きな評判を得た。1927(昭和2)年人間と自然の調和が認められる《大原女》を出品。国画創作協会第1部(日本画)解散(1928)後は帝展に出品し、1929年第10回展に華麗かつ清澄な《罌粟》を、1933年第14回展には朝鮮に取材した繊細で気品ただよう《平牀》を発表した。また、新樹社・七弦会・清光会の展覧会にも出品している。版画関係では、国画創作協会展が1925年の第1回春季展に最初の版画の出品(4点)を受入れ、その後も数点ずつ受け入れ、第1部解散を発表した1927年の第7回展では第1部のなかに版画室を設けているが、麦僊自身は制作に無関心であった。1923年11月開催の日本美術展(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社主催)出品の《夏の舞子》を木版画化した《舞妓図》(柳屋 1924)、1923年大阪市美術協会第1回展出品作品を同じサイズで木版

画化した《舞妓鈴技図》(柳屋 1924)、マリア画房出版の『新進花鳥画集』(1931～33)所収のザクロを描いた木版画が知られる程度である。1936(昭和11)年6月10日京都で逝去。【文献】『土田麦僊展図録』(東京国立近代美術館 1997)／『土田麦僊 近代日本画の理想を求めて』展図録(新潟県立近代美術館 2009)(滝沢)

### 土屋吉太郎(つちや・よしたろう)

長野県上田市常盤城に生まれる。長野県師範学校二部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第1号(1938)に《古城》を発表。1939年同校を卒業し、小県丸子小学校に勤務。【文献】『樹水』1／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

### 土矢堅証(つちや・けんしょう)

東京の料治熊太が発行した版画誌『白と黒(第一次)』第32号(1933.2)「郷土玩具創作版画集」に《縫ひぐるみ猿》を発表。また1934(昭和9)年に版画家武井武雄が全国の芸術家に呼びかけて始めた年賀状交換会「版交の会」(第3回からは「榛の会」と名称変更)の第1回(1935)に参加するが、この回のみ参加となった。当時、福井県坂井郡坪江村前谷に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

### 土屋光逸(つちや・こういつ) 1870～1949

1870(明治3)年8月28日土屋熊治郎とやすの次男として、現在の静岡県浜松市三島町の農家に生まれる。本名は「佐平」といい、14歳の時に上京し、当初寺修行に入った後、松崎秀明堂という印判屋で働くこととなった。しかし、何としても絵描きになりたい一心で、松崎と懇意であった鶯亭金升(1868～1954)の仲介によって、16歳でようやく小林清親(1847～1915)の内弟子となる。弟子の中でも一番若かった光逸は、清親の仕事の下働きのほか、小林家の中にあつて家族の一員としての扱いを受けながら、大工仕事・転居の借家探し・子供の世話・その他家事全般を任されて懸命に働いた。1895年までに日清戦争を題材に、「光逸」の雅号で木版画による戦争絵を4点出版したが、1900～1910年頃にかけて、清親は光逸を石版画の専門家として育成したいと考えて、教訓歴史画・教育画シリーズの石版画制作に注力させながら、毎日眞景を写生することを教えた。

光逸は絵師として独り立ちしていくうえで、いくつもの困難に遭遇したが、特に痛手だったのは、1911年妻りと(鶯亭金升夫人の妹)の病死、次いで1912年清親妻芳子の逝去、更に1915年に恩師清親の永眠と、立て続けに三人の身内や身内同然の人を亡くし、更に致命的なことには光逸自身が肋膜炎を患い、石版画の仕事を断念せざるをえない状況となった。1918年茅ヶ崎滞在中に紹介された鈴木マスと再婚。1920年に長女マサを出産するが、妻マスはすぐに病没。1922年には、東京芝高輪から転居して亡妻マスの郷里茅ヶ崎を定住の地として創作活動に専念する。1924年に亡妻マスの妹トヨと三度目の結婚で再起を誓い、1925年以降、尚美堂田中からの依頼で、専ら中国輸出向けの絹本掛軸画を描き辛うじて生計を支えた。転機が訪れるのは1931年のことで、1920年代から浮世絵の彫摺技術の再興を図って新版画運動を提唱していた渡邊庄三郎が、「小林清親翁十七回忌記念展覧会」を開催。清親の弟子として展覧会を手伝っていた光逸は、庄三郎との知遇をえて新版画の制作を勧められる。翌年、渡邊版店主催「第3回現代創作木版画展覧会」にて《祇

園の夜桜》と《大阪城の月夜》の2点の木版画を試作出品することで、遅ればせながら60歳で新版画家デビューを果たす。渡邊版画店からは、1940年までに近江風景などをモチーフに全部で10図出版した。当時渡邊版画店では、川瀬巴水・伊東深水をはじめ多数の絵師が活躍しており、当初から光逸が高評価される余地はなく、他の新興版元との接点を探るうち、新版画に着目していた土井版画店の土井貞一と遭遇。1932年～36年にかけて、光逸の代表作に相応しい東京風景シリーズ12図(《増上寺の雪》《日比谷の月》《弁慶橋》など)を完成する。次いで、日本風景集シリーズとして、《春の雪京都円山》《春雨の松島》など全国各地の景色を題材に新版を企画したが、戦争等の影響により7図で未刊に終わる。土井貞一版として戦前出版された光逸作品は、大錦版・三切版・中判(葉書版以下を除く)を含めて70図が確認されており、恩師の清親が得意とした光線画による光と影の絶妙な情趣を醸し出している。渡邊版画店・土井版画店以外では、今のところ尚美堂田中版3図、カワグチ版3図、竹村秀雄版35図、馬場信彦版20図の出版が確認されている。1941年12月太平洋戦争勃発後は、欧米向けの新版画輸出は完全にストップしてしまったため、光逸は自宅で戦没者の肖像画や床間絵などを描くしかなかったとのこと。1949(昭和24)年11年13日茅ヶ崎市南湖の自宅にて肺炎のため逝去。なお、光逸が描いた肉筆作品や版下絵(水彩原画)については多数制作されたはずだが、1997年に遺族から茅ヶ崎市美術館へ寄贈された人物画や花鳥画など数点しか発見されていない。【文献】小林哥津『清親の追憶』(中央公論社 1924)／大曲駒村編『浮世繪志第二拾七号(清親特集号)』(1931)／花柳・小島編『鶯亭金升日記』(演劇出版社 1961)／『風光礼賛—土屋光逸展』図録(茅ヶ崎市美術館 1999)／『土屋光逸作品集』(近江ギャラリー 2007)(土井)

#### 土屋四郎(つちや・しろう)

1933(昭和8)年、日本各地の版画同人誌に作品を発表していた長野県須坂の小林朝治は、平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」(須坂小学校)を契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画誌『櫟』(1933～1937)を発行した。当時、上水内郡安茂里小学校に勤務していた土屋もその講習会に出席したものと思われ、第1輯(1933.8)に《アッパッパ》、第2輯(1934)に《賀状》、第4輯(1934.11)に《風景》、第5輯(1935.4)に《賀状》を、その後、第7輯(1935.8)に《姉さま》、第8輯(1935.12)に《蔵書票》《脱腸》、第9輯(1936.4)に《賀状》、第10輯(1936.7)に《妻の像》、第11輯(1936.11)に《初秋小品》、第12輯(1937)に《賀状》を発表する。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 土屋清一(つちや・せいいち)

長野県北佐久郡大里に生まれる。長野県師範学校一部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第3号(1940～41?)に《煙る浅間》を発表。1945年同校を卒業し、北佐久郡軽井沢中学校に勤務。【文献】『樹氷』3／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

#### 土屋常義(つちや・つねよし) 1897～1977

1897(明治30)年11月20日長野県上田市に生まれる。

1921年東京美術学校師範科を卒業。1926年岐阜県師範学校教諭となる。1962年岐阜大学教育学部教授を停年退職。『円空の彫刻』(造形社 1960)の刊行など、円空仏の研究者として知られる。1967年岐阜県文化賞受賞、1972年より円空顕彰会々長を務める。1977(昭和52)年9月11日岐阜市で逝去。版画については、『エッチング』45号(1936.7)に西田武雄を講師に招いた座談会のことを「岐阜の集り」と題して寄稿。その中で「僕はエッチングは一寸やつたことがあるといふだけで、プレッスも組立てたま、であるだけだが、岐阜では中学の神田君が二台もプレッスを買つてゐるし、二中の山本君も少しはやつてゐるし、大垣高女の渡邊君も大に趣味をもつてゐることを知つてゐるなどで、岐阜地方も、エッチングをやりさうな空気が見えるのだが、然しまだ西田さんの御話をきく程の何等の準備工作も出来てないのである。」と当時の岐阜でのエッチングをめぐる状況を語っている。作品は未見。【文献】『エッチング』45／『日本美術年鑑』昭和53年版(東京国立文化財研究所 1980)(樋口)

#### 土屋政子(つちや・まさこ)

1925(大正14)年頃に千葉東金高等女学校(現在の県立東金高等学校)の生徒だった土屋政子は、大谷三代らと版画の会を結成し、版画誌『私達の版画』第一輯を刊行。また同校の校友会誌『梧桐』にも木版画を発表する。校友会誌『梧桐』については、恩地孝四郎が『詩と版画』第12輯(1925.7)の消息欄「印象と夢想」で、「千葉東金高等女学校校友会から出た校誌である。かかる校誌の出たことは大変愉快だ。生徒の手になる藝術的作品のみで満されたこの校誌は、此種のものとして珍重すべきだ。殊に愉快なのはカット挿絵が創作木版でせられてある点で、この点は、明かに最初のものであらふ。この生徒たちの手になった木版はみな可憐であり素朴である」と紹介。また、藤森静雄も第13輯(1925.8)の同欄で、「中学校の校友会誌にこんな自由な気持の外に見た事がない。巻頭の小説「姉」(大塚とみ氏) 緋細「ママ」な女性の感能でよく描かれて居る。挿絵の長谷川とき氏の「野へ行く道」は素純さを持つ、作である。版画にもまた、作が多い。土屋政子氏の「風景」「静物」はいゝリズムを持つて居る。代表的のものである。全体としてはすこし個性さに欽けて居る様である。よりよき善導を望みたい」と紹介している。【文献】『詩と版画』12・13(1925.7・8)／「美術界消息」『中央美術』11-9(1925.9)(樋口)

#### 土屋義郎(つちや・ぎろう) 1900～1991

1900(明治33)年3月25日山梨県八代軍三珠町に生まれる。山梨県師範学校卒業後教職に就く。1919頃より独学で絵画を始める。1922年第9回草土社展(1922)の一般公募に応じて出品した17点が全点入選、第2回草土社賞を受賞、社友に推挙される。その後上京するが、岸田劉生の京都転居などで草土社が自然解消したため、同年1月創設の春陽会に参加。翌年の第1回春陽会展(1923)～第22回展(1944)まで(第18・19・20回を除き)毎回出品する。この間、1937年在京の穴山勝堂・近藤浩一郎・望月春江らと山梨美術協会結成に参加する。戦後は、1947年春陽会会員に推挙され、郷里山梨にあって身近な風景や草花などを描き、山梨美術協会会長などを務めた。1991(平成3)年9月17日逝去。版画の制作は、横堀角次郎・久泉共三と3人で版画誌『版画』を創刊(1927.1)。創刊号に野村俊彦刻・摺による多色木版《静物》2点を制



作。野村は河野通勢の義弟で、帝展や日本創作版画協会、日本版画協会などにも出品する版画家だが、当時は内弟子として木村莊八に絵画を学んでおり、発行所の「版画社」の住所は「東京市本郷区森川町一〔番地橋通 366〕木村〔莊八〕方」。確認できるのは創刊号のみだが、加治幸子『創作版画誌の系譜』によると、3号まで刊行の可能性もあることから、以降の制作も考えられる。なお、『版画』について、『中央美術』第13巻第3号(1927.3)の新刊案内に「版画社より発刊された隔月発行の版画集の第一輯で、作家は春陽会系の、横堀角次郎、土屋義郎、久泉共三の三氏、この三人の作品を野村俊彦氏が彫刻及手刷した六葉を取めたものである。版画の傾向は大體に於いて東洋趣味から生まれた小味なもので、矢張りこれ等作家の描く油絵に共通した所が見える。従来発行されてある数多い創作版画の類とは少し趣を異にしたものであろう」。また『アトリエ』第3巻第12号(1926.12)の新刊紹介にも同様の紹介記事が掲載されていて、隔月の刊行予定だったことがうかがえる。【文献】『創作版画誌の系譜』／『近代の美術 43』(至文堂 1977.11) (樋口)

### 土屋楽三(つちや・らくさん) 1896～1976

1896(明治29)年に生まれる。本名は浩三。楽山・篁子(こうし)・篁子生・楽山篁子(生)などと号す。楽山の経歴については不明な点が多い。ただロンドンのJapan Print Galleryの調査によると、楽山は京都や富士の風景画、花鳥画などを描く竹内栖鳳門下の日本画家で、木版による花鳥画の制作や摺師、更に自ら工房を経営するなど多彩な活動を展開していたらしい。木版画の制作については、大判の多色摺版画集『楽山花鳥画譜』(全100図 1929～1933)、大判の多色摺版画集『篁子生画選』(全36図 1933～1935)、大判の単色版画集『篁子生石摺画選』(全180図 1933～1935)のほか中判のお土産用風景版画やグリーティングカード、千種掃雲と競作の木版画集『洋花画譜 上・下』(マリア画房 48図と付図1図 1931)などの制作がある。ただ、摺師や版元の活動についてはJapan Print Galleryの調査では触れられておらず、詳細は不明。なお花鳥を題材とした輸出用と思われる「楽山」名の木版画の作品があるが、土屋楽山と同一人かは確認できていない。【文献】「Rakusan.net」(Dr Michael JP Nichols 2015) (樋口)

### 土山 彬(つちやま・あきら)

東京で発行された版画同人誌『爆竹』は、第4～7号(1929～1930)が確認されている。土山はその第5号(1930.1)に《冬》、第6号(1930.3)に《目黒駅にて》、第7号(1930.5)に《ビール工場展望》を発表。『爆竹』は創刊号から3号が未確認であるため、発刊の経緯は不明であるが、号を重ねるにつれ、プロレタリア美術系へと傾向を強めていく。その中で土山は版画初心者として、プロレタリアを意識しない版画を作っている。第5回研究会(前号合評)記録には、版木の桜にこだわらず、朴でも何でもぐんぐん彫った方が良いとか、遠近が出てないなど先輩からのアドバイスが書かれている。なお、「近代詩集目録」(インターネット)には、土山が上梓したと思われる詩集『詩室』(私家版 1933)が掲載されているが、未見。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

### 筒井年峰(つつい・としみね) 1863?～1934?

筒井年峰の略歴を示した例に『此花』の「現今浮世絵

師(一)」欄(1910.1)があり、「師門 故月岡芳年」、割注があって「菊地齋畫風私淑」とし、「俗稱 筒井勇藏」「年齢 四十六(慶応元年生)」「生地 兵庫県摂津國川邊郡伊丹町」「現住 東京市赤坂区青山北町四丁目九十三番地」と記す。だが、「慶応元年」生れには疑問があって、『古今書画名家全傳』(川瀬鷗西著・松山堂 1903)には「文久三年七月摂津伊丹町」とあって、生年が1863(文久3)年か、1865(慶応元)年かで異同がある。現在の兵庫県伊丹市の商家に生れ、1887年頃に商業見習のために上京(茅場町に住む)、生来、絵を描くことを好み、最初、河鍋暁斎の門をたたいたが無闇に弟子を取らないと断られ、月岡芳年の門に入門。と同じく四條派の(姓不明)旭峰にも学んだ。芳年の勧めを得て、雅号を二人の師より一字づつ頂き「年峰」と付けた。ところが父が病気に罹り帰郷、全快をみて大阪で(1892頃)新聞挿絵や雑誌挿絵の仕事に従事。1893年に『めざまし新聞』から招聘され再び上京。1896年4月には『時事新報』に入社し挿絵と共にカメラマンとしても活動。あるいは、求めに応じて書籍や雑誌の口絵版下絵も描き、1895年からの『文芸倶楽部』(博文館)口絵掲載の常連となる。単行本では西村天因・渡辺霞亭・江見水蔭・巖谷小波・泉鏡花らの著書の口絵で活躍し、海外にも木版口絵の画家としてその名を知られている。1898年の向島百花園建立「月岡芳年翁之碑」にも芳年門人としてその名を残している。没年を1934(昭和9)年頃と伝えるものがあるが確証を得ない。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005)／岩切信一郎「筒井年峰について」『一寸』33(2008.2)(岩切)

### 都筑 元(つづき・はじめ)

本郷絵画研究所に学ぶ。1935(昭和10)年の第22回光風会展にエッチング《をんな》が入選。作品図版は『エッチング』第30号(1935・10)には《舞妓》と改題して掲載されている。【文献】『第85回記念光風会目録集』(光風会 1999)／『エッチング』30(三木)

### 堤 恒造(つづみ・つねぞう)

1934年当時、大分県荷揚小学校に勤務し、日本エッチング研究所製エッチングプレスを所有。また1936年に武藤完一が主導する「大分エッチング協会」の創立に名を連ねるが、作品は未見。【文献】『エッチング』22・47(樋口)

### 常察英雄(つねみ・ひでお) 1902～没年不詳

1902(明治35)年愛媛県に生まれる。学歴などは不明であるが、1933年10月の第14回帝展に木版画《名残》が初入選。その後、小野忠重らの「新版画集団」に参加し、機関誌『新版画』第11号(12.25)に《街の女》、第12号(1934.4.10)に《モデル》を発表。また、1934年4月の新版画集団小品展(8～12 銀座・版画荘)に《婦人像》《婦人像》《七面鳥》、6月の第1回版画アンデパンダン展(12～14 神田・東京堂画廊 主催：新版画集団)に《婦人像》を出品した後、退団。同年10月の第15回帝展に《少憩》が再び入選。その後も、1936年の昭和十一年文展鑑査展に《園碁に遊ぶ》、1937年の第1回新文展に《訪れ》、1939年の第3回新文展に《池に面せる人々》が入選した。【文献】『新版画集団小品展覧会目録』『第一回版画アンデパンダン展覧会目録』(各1934)／『原色浮世絵大百科事典 第10巻 風俗絵師と現代版画家』(大修館書店 1981)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

### 螺良哲雄(つぶら・てつお) 1890～1946

1890(明治23)年、栃木県河内郡本郷村(現・上三川町)東汗に生まれる。1910年、真岡中学校(現・真岡高等学校)を卒業後、医大を目指して上京するが、1914年には栃木県師範学校第二部に入学する。1916年に卒業し、雀宮尋常高等小学校に勤務。1923年、姿川第一尋常小学校に赴任したことから、当時、姿川尋常高等小学校に勤務していた池田信吾や篠崎喜一郎と知り合う。池田や篠崎らは後に川上澄生を慕って1925年に版画誌『村の版画』(1925～1934)を創刊する。螺良は第2号(1925.2)に《風景》を発表するが、同年、豊郷尋常高等小学校に転勤となり、『村の版画』への参加は第2号のみとなった。以後、版画制作は確認されていない。1946(昭和21)年、河内郡羽黒村今里小学校校長在職中に逝去した。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

### 艶久(つやひさ) ➡ 瀬川艶久(せがわ・つやひさ)

### 鶴岡郭年(つるおか・かくねん)

経歴は不明。《夜霧の桑港市庁》(1936)《霧の金門橋》(1937)《黄昏のカーメルハイランド》(1938)の木版画の制作がある。【文献】『山田書店新収目録』40(2000.4)(樋口)

### 鶴木滋夫(つるき・しげお)

1938(昭和13)年5月角野〔のち金子姓〕誠治・千葉七郎・斎藤清と共に「小樽創作版画協会」を設立し、8月に第1回展(26～28 小樽・丸井デパート)を開催。翌年か、樺太へ移る。その頃のことについて金子誠治は、「2回展のプランを立てている間に、鶴木氏は樺太へ、私は朝鮮旅行中に右腕の骨髄炎になり制作出来ず、斎藤氏は在京でしたし、何となく流会になったまま、戦争の時代に突入していきました」(『交遊録・小樽の作家シリーズ② 小樽版画史 草創期の人々』)と証言する。その後の消息は不明。【文献】金子誠治『交遊録・小樽の作家シリーズ② 小樽版画史 草創期の人々』『市立小樽美術館報』9(小樽市立小樽美術館 1994.10)／『金子誠治展』図録(小樽市立小樽美術館 1996)(三木)

### 鶴田吾郎(つるた・ごろう) 1890～1969

1890(明治23)年7月8日東京市牛込区(現・東京都新宿区)に生まれる。早稲田中学校を中退し1905年倉田白羊に洋画を学んだ。また、同年に赤坂溜池の白馬会洋画研究所に入り、ここで中原悌二郎や中村彝らを知る。1907年太平洋画会研究所へ移り中村不折の指導を受けた。1910年味の素株式会社広報部に入るが1912年京城日報社に入社し絵画部を担当した。1915年川端龍子と「スケッチ倶楽部」をつくって通信教育の講義録を担当する。1917年から1920年まで大連・ハルビン・シベリアを遍歴、帰国した1920年の第2回帝展に《盲目のエロシエンコ像》を出品した。以後、多くの作品を帝展・新文展・日展で発表した。1930年シベリア経由でヨーロッパを旅行し、フィンランド・スウェーデン・ドイツ・フランスなどを約10か月間遊歴した。1942年陸海軍の依頼で従軍し戦争記録画の制作に携わり《神兵、パレンバンに降下す》などを制作した。戦後は1946年に自宅の画室を開放して「アカデミー美術研究所」を開設。1952年に日本国立公園30点の制作に着手し、1955年には「日本山林美術協会」を創立した。制作した版画の数は多くないが、1910年代

の作品に、川端龍子とともに発行した『スケッチ倶楽部画集 華巖』(全30図 1917)に収められた《湯の湖畔》などの伝統木版画のほか、《霜の朝》(1915)《窯》(1915)《散歩する印度の女》(1916)《失題》(1916)など、単品の同種の木版画がある。1930年代には、加藤潤二経営の加藤版画店から出版の《大平峠(信州)》《諏訪の森の富士》(共に1936)などの木版画を、さらに日本新版画協会出版の『日本新版画集・前集』に収められた《九十九里の漁夫》などの木版画を制作した。また、1937年3月発行の『教育美術』に「合羽版に就て」(1943年9月発行『日本版画』)『エッチング』改題)128号に再録)を掲載し、版画への関心を表している。『エッチング』57号(1937.7)には西田武雄主宰エッチング研究所製の銅版画プレスを所有していたことが明記されており、銅版画を制作した可能性もある。1969(昭和44)年1月6日東京で逝去。【文献】鶴田吾郎著『半世紀の素描』(中央公論美術出版 1982)／『日本の版画II 1911-1920 刻まれた「個」の饗宴』展図録(千葉市美術館 1999)(滝沢)

### 鶴田豊造(つるた・とよぞう)

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった「下水内郡手工研究会」が発行した版画誌『葵』の第5号(1938.3)に《仁王尊》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

### 鶴濱栄吉(つるはま・えいきち)

1939(昭和14)年6月に開かれた朝井清の主宰する第2回県版画倶楽部展に出品。【文献】『日本版画協会会報』31(1939.9)(三木)

### 【て】

### 出下梅次郎(でした・うめじろう)

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第9号(1932.12)「全日本版画家年賀状百人集」に木版画の賀状を出品。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

### 手島幸雄(てじま・ゆきお)

名古屋に設置されていた愛知県第一師範学校(現・愛知教育大学教育学部)関係の版画同好会と考えられる「版木会」が発行した創作版画集『版』(1937-38)の第5輯(1937.5)、第6輯(1937.6)に各1点の木版画を発表する。「版木会」は在學生や卒業生、その紹介者などで会員が構成されていると考えられるが、どのような会なのかは詳細不明。【文献】『版』5・6／「第一師範学校(名古屋)及び附属学校に關係する資料」インターネット(加治)  
\*訂正とお詫び:版木会については同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校の版画同好会と考えてきましたが、『版』は名古屋市に設置されていた愛知第一師範学校の関係出版物と判明したため、ここでお詫びして訂正いたします。

### 手塚恒二(てづか・つねじ) 1908～2002

1908(明治41)年7月、長野県北安曇野郡宮本(現・大町市)に生まれる。1927年、大町中学校(現・大町高等学校)を卒業し、小学校の教師となるが、そこで、画家であり、教育者の宮坂勝と出会う。宮坂は「三元社(後の松本洋画研究所)」を主宰し、洋画を志す若者を指導しており、手塚も絵画について教恩を受け、「三元社」に参加する。1937年、長野県安曇野の小学校教師たちは、教育者であり、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問

に迎えて黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』（1937～1938）を発行。当時、手塚は北安曇郡野七貴小学校に勤務しており、その第1号（1937.3）に木版画《道》《雪》の2点を発表する。戦後は甲信地方の小学校や高校の教師の傍ら、水彩画家の小堀進に師事し、本格的に絵画（水彩画）への道に踏み出す。不透明絵の具を使った新しい水彩画の世界を切り開き、日本水彩画会展、水彩連盟展や白日会等に出品。長野県展や中信展などへも発表を続ける一方、信州美術会、中信美術会の発足にも携わる。1951年から10年ほど白山卓吉、高島仁らと「松本水彩画会」を結成し、公募展も開催する。1980年には『山河ありて』（遠兵パブリコ）（未見）を、1988年には作品70点を収めた『手塚恒二画集』（電算出版社）（未見）を上梓する。1980年に大町市芸術文化功労賞、1995年に松本市芸術文化功労賞を受賞。2002（平成14）年に逝去。「信州の現代芸術の世界」の経歴には「旧姓松田」とあるが、詳細は不明。【文献】「信州の現代芸術の世界」（『長野県美術全集』12巻 郷土出版社 1997）／『松本平の近代美術 美術館を夢見た作家たち』展図録（松本市美術館 2007）／『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 寺内長造（てらうち・ちようぞう）

長崎県の中学校教員。1936年頃は長崎県立大村中学校に勤務する。木版画は、1934年夏（7月か）に「版画長崎の会」（主宰：田川憲一）が平塚運一を招いて開催した第1回版画講習会（長崎・磨屋尋常小学校）で習得したものである。その後、「版画長崎の会」の同人となり、『版画長崎』の第4輯（11.10）に《菊》を発表。翌1935年4月の第10回国画会展に《浦上天主堂》が初入選。8月の第2回版画講習会（磨屋尋常小学校 講師：平塚運一 主催：版画長崎の会）にも参加し、同月発行の『版画長崎』第5輯（8.13）に《古賀人形》を発表。続く1936年は、4月の第11回国画会展に《石橋》が再び入選。8月に行われた西田武雄と同地の小林長太（長崎県師範学校教員）が指導するエッチング講習会（16 長崎県師範学校）と長崎文化協会主催の西田武雄を囲む「長崎座談会」に参加。さらに1937年には、7月の西田武雄と恩地孝四郎の指導する版画講習会（21～25 長崎・勝山尋常高等小学校）に参加。12月の第2回大潮会展に版画《大浦天主堂》が入選したが、版種は不明。その後の活動などは不詳。【文献】阿野露団「平塚運一（1）」『長崎を描いた画家たち（上）』（形文社 1988）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／中村善策「大潮会展評」『みづゑ』395（1938.1）／『エッチング』47・58・59（三木）

#### 寺崎廣業（てらさき・こうぎょう）1866～1919

1866（慶応2）年2月25日（新暦4月10日）秋田の東根小屋町（現在の秋田市中通）に生まれる。幼名忠太郎。廣業は本名だが本来の読みは「ひろなり」。1882（明治15）年地元の狩野派の絵師小室秀俊（怡々齋）に入門。1888年に上京し、平福庵にも学んだ。翌年東陽堂に入社し、『絵画叢誌』や『風俗画報』の版下絵を担当。中国や日本の古画縮写や現代風俗の挿画を手がけて流派を超えた多彩な筆法を身につけた。1890年第3回国勤業博覧会で《東遊図》が褒状。翌年日本青年絵画協会の創立委員となり、同会で好成績を続けて地歩を固め、1897年東京美術学校助教授。翌年岡倉天心に和して美校を辞し、日本美術院に参加するがまもなく離れ、1901年美校の教

授として復職。1907年第1回文展より審査員。画壇に揺るぎない位置を得て世の人氣も高く、1902年に開いた「天籟画塾」は1916年には門弟が300人にも及んだという。1917年に帝室技芸員に任命されるも翌年体調を崩し、1919（大正8）年2月19日東京市小石川区関口町にて逝去。

版の仕事は多く、まずはすでにあげた『絵画叢誌』と『風俗画報』がある。本画家として名をなして以降も出版界との縁は続き、東陽堂で後に博文館の支配人となる大橋乙羽と知りあったことから同社の仕事をあまた手がけ、明治の末にかけて『婦女雑誌』『幼年雑誌』『少年文学』『少年世界』『明治文庫』『文藝倶楽部』などに下絵を寄せた。『都新聞』や『東京日日新聞』、『新著月刊』や『新小説』にも作がある。絵葉書の下絵も描いた。なかでも美人画は東陽堂時代から長く人氣を博し、1903年の『文藝倶楽部』9巻10号の口絵となった水着姿の美人のようなセンセーショナルな例もある。廣業は、日本画家は当世風俗を描くことも必要だと考えており、出版界での美人画の修練を本画にも生かし、たとえば1899年の《秋苑》（日本絵画協会第7回・日本美術院第2回連合絵画共進会で銀牌）のような清新な作例を残している。近代筆法による当代美人を芸術に引きあげるに力があったといえるだろう。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）／『特別企画展 生誕140年 寺崎廣業展図録』（秋田県立近代美術館 2006）（西山）

#### 寺崎武男（てらさき・たけお）1883～1967

1883（明治16）年3月30日東京市赤坂区に生まれる。1902年東京美術学校予備課程に進み、1907年西洋画科本科卒業。在学中、岩村透にイタリア美術史を学ぶ。卒業の年に農商務省の海外実業練習生としてヴェネツィアに渡り、美術アカデミーで学ぶ。絵画や彫刻、建築、版画などを広く修め、ベルリンでの壁画研究なども経て1916年に帰国。翌年第11回文展にフレスコ画《飛鳥朝の夢》で初入選。1918年東京女子美術学校洋画科主任となる。制作のかたわらヨーロッパの伝統的な絵画技法を日本に伝えることに努め、同年日本創作版画協会設立（後述）、1929年テンペラ画会結成、1935年日本壁画協会結成。聖徳記念絵画館に納められた《軍人勅諭下賜》は和紙にテンペラで描かれていた。また法隆寺壁画の研究や、ヴィンチェンツァで天正遣欧少年使節を描いたフレスコ画に出会ったことをきっかけに、この主題をライフワークとしたことでも知られる。1938年より画壇から離れ、別荘のあった千葉県館山市で制作。戦後1949年から千葉県立安房第一高等学校の美術講師を勤め、1954年まで館山住。1967（昭和42）年2月16日東京にて逝去。

版の分野ではエッチング作家として知られ、留学から帰国した翌年、1917年の光風会第5回展に岡田三郎助の仲介でエッチング20点（『美術新報』16巻5号の記事では17点）を展示。1918年の日本創作版画協会設立には発起人として参加、会員として第1回展、第5～8回展にエッチングを中心にモノタイプと石版画を加えて出品。『版画』（小泉癸巳男編）1巻1号（1921.11）への寄稿と『詩と版画』（小泉癸巳男編）2輯（1923.3）への作品掲載もある。1929年には洋風版画会の結成に参加、1931年創立の日本版画協会でも会員として第1回展に出品。官展では創作版画が初めて受理された1927年の帝展第8回展、続く第9回展にいずれもヴェネツィアに取材した版画（銅版画か）で入選、1936年の文展招待展に版画《ギリシャオリンピヤの遺跡》を出品、1938年の第2回新文展に無鑑査で石版画《防共の獅子（ベ

ニス)》を出品している。文章でも、1918年から翌年にかけて『みづゑ』誌上に「エッチングの沿革とその方法」を連載、『中央美術』5巻2号(1919.2)に「日本版画とエッチングに就て」を掲載、1926年『アトリエ』誌上で「エッチングのやり方」を連載、1930年に『水彩・パステル・版画の研究』(アトリエ社 1930)に「エッチングの技法」を寄稿するなど、銅版画への理解が乏しい当時の日本においてエッチングの普及に努めた貴重な人であった。エッチング作品は、ほとんどがヴェネツィアに取材し、1916～18年に集中、微細な線を重ねて画面全体を揺るがせるような表現を特徴とする。『美術』1巻4号(七面社 1917.2)に発表した「ディナミックとオーケストラチオン」(談)で寺崎は、自然を個々の色や形を超えたエネルギーの集合体と捉え、それへの感興の表現こそが芸術だとする独自の画論を展開した。そのなかで「エッチングは(ヴェネツィアで)自分のやった仕事の一つで…試験的に、線ばかりでも自分の楽しい感興を充分に發揮する事が出来る」と信じて、線のムチカール、オーケストラチオンをもって、自然のディナミックと、自分の感興との表現をやった」と語っており、特異な造形を生み出した寺崎の芸術観を窺うことができる。【文献】『日本銅版画史展-キリシタン渡来から現代まで』図録(東京都美術館 1982)／『特別展 今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景銅版画と考現学の出会』図録(渋谷区立松濤美術館 2001)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『生誕120年記念企画展 房州を愛してやまなかつた日本近代絵画の先駆者 寺崎武男の世界』展図録(館山市立博物館 2003)／『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(西山)

#### 寺島香積(てらじま・こうせき)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)4年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)を再刊しようと鈴木嘉壽・小松行高ら5年生が中心となって版画誌『刀 再版』(1940～1941)を創刊する。寺島も参加し、第1号(1940)に《山》、第2号(1940.10)に《連丘》、第3号(1941)に《岩山》を、5年に進級して第4号(1941)に《窓》を発表する。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 寺島莊治(てらじま・そうじ)

長野県安曇野地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』(1937～1938)を発行した。その第1号(1937.3)に《アルプス遠望》を発表。当時、北安曇野郡七貴小学校に勤務し、「黄樹社」の会長を務める。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 寺平誠輔(てらひら・せいすけ) 1917～没年不詳

1917(大正6)年、静岡に生まれる。静岡中学時代の1932年頃から版画を始め、小川龍彦や中村岳らが創刊した版画同人誌『ゆうかり』(童土社)の第15・16号(1933.7)から作品を発表する。その第15・16号に《ミーチャン》、第17号(1933.10)に《ゼラニューム》、第18号(1934.2)に《山道》、第19号(1934.4)に《興津遠望》、第20号(1934.8)に《海芋の花》を発表。中学卒業後は京都市立絵画専門学校で学び、第3回京都市美術展覧会(1938年)に日本画

《冬の林》を出品。1940年に同校を卒業。戦後は静岡精華学園高校や静岡市立商業高等学校で教鞭をとる。版画の指導にも力を入れ、その教え子からは年賀状版画コンクールの入賞者も輩出した。その傍ら、制作を日本画に絞り、第16回新制作協会展(1952)に《夜》が初入選。同年11月の第6回静岡美術展(静岡松坂屋)への出品をはじめとして、個展でも作品を発表する。第11回静岡美術展では審査員となるなど、日本画家として活躍。さらに鳥声苑(私塾か?)での若手への育成も行っている。戦後の日本画発表には「誠介」の画号を用いている。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』(童芸工房 1967)／立花義彰「静岡近代美術年表 昭和戦後編」『静岡県博物館協会研究紀要』38・38号 2014-15)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 天間正五郎(てんま・しょうごろう) 1899～1981

1899(明治32)年北海道函館に生まれる。1918年函館商業学校を卒業。在学中から油彩画を手掛け、1921年に山本行雄・池谷寅一・内山精一らと北海道で最初の組織的な洋画団体「赤光社」を結成。8月に第1回展(23～25函館公会堂)を開き、戦前は1942年の第19回展まで開催した。一方、1925年6月に全道的な組織として結成された「北海道美術協会」にも創立会員として参加。10月の第1回北海道美術展〔道展〕に油彩画《裸婦小品》を出品。翌1926年の第2回展出品の《花》で市長賞、1929年の第5回展出品の《早春近郊》で長官賞を受賞した。またその間、1926年の第4回春陽会展に《静物》が入選。1929年春の「函館美術協会」設立にも参加した。版画を始めた時期は不明であるが、1930年の第6回道展に初めて木版画《本郷夏景》《晩春》《谷地頭風景》を出品。翌1931年には、第9回春陽会展に木版画《大沼の秋》、第1回新興版画会展(6.21～25 新宿・三越、大分展:8.5～6 大分・丸吉)に《初夏のアルプス》《澄別温泉風景》《アルプス温泉》《北国の山》、第1回日本版画協会展に《川汲街道》《大沼附近》《降灰の鹿部》《登別温泉》《根岸海岸》がそれぞれ入選した。翌年(1932)2月か、日本版画協会の会員に推挙され、同年の第2回展に《湖畔》《大沼秋景》《温泉場》《風景》《風景》、1933年第3回展に《降灰の鹿部》を出品。その間、1932年には前田政雄と版画展(8.20～24 函館・森屋百貨店)を開催している。戦後は、全道美術展(全道美術協会 1945.12 創立、翌年第1回展開催)と赤光社展(1946再開)を中心に作品を発表。日本版画協会展へは、1950年の第18回展に一般応募として《立待岬》《蓴菜の沼》《湖畔の家》を出品。また、翌年の第19回展には会員として《大沼谷風景》《婦人像》を出品したが、1952年退会した。1970年第21回函館市文化賞を受賞。1981(昭和56)年函館市で逝去。【文献】今田敬一編『北海道美術史 地域文化の積みあげ』(北海道立美術館 1970)／橋本三郎編『赤光社50年記念 函館周辺美術文化』(赤光社美術協会 1971)／大熊敏之「大正期の函館洋画壇の成立とその周辺-赤光社創立をめぐる-地域史研究 はこだて」9(函館市史編さん室 1989.4)／『第一回新興版画会展出品目録』(1931)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『第18回日本版画協会展目録』『第19回日本版画協会展目録』(1950・1951)／『版ニュース』6(輝開 2000.10)(三木)